

博士學位論文審査要旨

申請者 田村景子
論文題目 「能楽と三島由紀夫」研究——『近代能楽集』の成立と展開
申請学位 博士（学術）
審査委員
主査 千葉俊二 早稲田大学教育・総合科学学術院教授
副査 金井景子 早稲田大学教育・総合科学学術院教授
竹本幹夫 早稲田大学文学学術院教授
井上隆史 白百合女子大学教授

1、本論文の目的と構成

本研究は、能楽と近代文学との関連を、生涯にわたって能楽への強い関心を持ちつづけた三島由紀夫の文学をとおして考察し、近代における能楽受容の実態を明らかにすることを目的としている。

本論は三部建ての全十二章で構成されているが、第一部においては明治以降の近代において能楽がどのように受容されて来て、「古典（カノン）」としての位置づけをどのように形成してきたかを論じ、そのうえで三島由紀夫の文学にそれがどのような範囲で、どんな影響をおよぼしているのかを検証している。第二部では、謡曲を現代劇として翻案した三島由紀夫の『近代能楽集』をとりあげ、個々の作品論を展開している。ここで取りあげられた作品は、「邯鄲」「卒塔婆小町」「葵上」「班女」「道成寺」「弱法師」「源氏供養」の七作品であるが、これらの作品に関して原曲との丁寧な比較をとおして現代を舞台として書き換えることの意味を論じ、古典と切りむすぶところで三島文学のテーマがどのように絡んでいるかを考察している。第三部は、近代において自己の作品に能楽をいち早く取りこんで創作し、三島由紀夫の文学の形成にも多大な影響を及ぼした郡虎彦や、三島の初期作品「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」と最後の大作『豊饒の海』四部作とを能楽との関連において論じ、論全体に広がりを持たせている。

目次によって全体の構成は示せば、以下のとおりである。

はじめに

第一部 近代における「能楽」の発見から三島由紀夫の能楽受容まで

序——三島由紀夫、その豊饒なる能楽表象

第一章 近代における能楽表象——国民国家、大東亜、文化国家日本における「古典（カノン）」として

第二章 三島由紀夫の能楽受容——「言葉の優雅」から「実際の行動」まで

第二部 『近代能楽集』作品論

序——未だ乗り越え不可能なものとしての『近代能楽集』

第一章 能楽における「生の否定」の発見——近代能楽集ノ内「邯鄲」

第二章 認識者と実践者、その葛藤の帰趨——近代能楽集ノ内「卒塔婆小町」

第三章 救いなき死の受容 ——近代能楽集ノ内「葵上」

第三章補論 近代能楽集ノ内「葵上」における死の表象

第四章 不幸と狂気の美的結晶体——近代能楽集ノ内「班女」

第五章 覚醒した紅い唇の女——近代能楽集ノ内「道成寺」

第六章 「この世のをはりの焰」は消えず——近代能楽集ノ内「弱法師」

第七章 切り捨てられた供養——近代能楽集ノ内「源氏供養」

第七章補論 ふたつの「源氏供養」——三島由紀夫の戯曲と橋本治のエッセイをめぐって

第三部 能楽との関わりで郡虎彦の戯曲と三島由紀夫の小説を読む

第一章 血の粉を撒いた「珍しい夜明け」へ——郡虎彦の戯曲「清姫 若くは道成寺」と戯曲「道成寺」

第二章 言語による美的抵抗——三島由紀夫「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」

第三章 『豊饒の海』の行き着いた「美しい衰亡」——能楽表象からの読解の可能性 おわりに

2、論文の概要

近代にとって能楽は、近代日本の文化的アイデンティティを構築するカノン（古典または正典）であり、同時に日常生活のなかに残る前近代の懐かしい遺物、また古いがゆえに現今の常識的な新しさを転覆する可能性をひめた異物でもあった。能楽へのつよい関心を、生涯にわたり持ち続け、自らの作品に能楽表象をちりばめた三島由紀夫は、遺物と異物という二重にあらわれる近代の能楽を、ともに継承しえた戦後作家である。能楽師が登場する小説「中世」（一九四五年）、謡曲を原曲とした戯曲集『近代能楽集』（一九五〇年～一九六二年）、謡曲の詞章や狂言のタイトルを借用する小説「金閣寺」（一九五六年）、形式的に能楽を継承したとされる小説「英霊の声」（一九六六年）、そして遺作となった『豊饒の海』四部作などよく知られた作品にとどまらず、他の小説や戯曲、評論やエッセイ、対談などの多くに、能楽は見え隠れする。「能楽はたえず私の文学に底流してきた」（「日本の古典と私」）と自らいうように、三島由紀夫と能楽との関わりはじつに広く深いものがある。

三島由紀夫の能楽への関心はまず、不明瞭な発音で謡われる詞章、縁語や掛詞に彩られた「言葉の優雅」（同）からはじまった。謡曲の装飾性への少年時代の魅惑はやがて言葉の裏に潜む「人の世の心情や、うらさびた哀歎の絵巻」（「掛詞」）へ、さらに「絶望感の裏打ちを必要と」する「裡に末世の意識をひそめた、ぎりぎりの言語による美的抵抗」（「私の遍歴時代」）へと移っていった。そして『近代能楽集』の試みの始まる前夜の「美について」では、「宗教的末世思想と美の優位との並行関係。トオマス・マンの暗示が思ひ出されるやうに、そこには明らかに美と死との相関がある。この相関は謡曲において完全な一致に到達する。日本に於て美は、人間主義の復活を意味せず、『生の否定』といふ宗教性を帯びるにいたる」と書いている。宗教的末世思想が優位であった中世にあって、謡曲は「宗教性」と「死」とを「美」によって結びつけていたが、彼岸の志向を持たない近代において「宗教性」「死」「美」という謡曲における三位一体の一角は失っていたのである。

近代においてあえて能楽を掲げる三島由紀夫にとって、仏教的救済にいたる「宗教性」の欠如

はむしろ積極的な意味をもっていた。たとえば、小説「恋重荷」（一九四九年）は、悲恋を仏教規範へと無理やりに回収する謡曲「恋重荷」から仏教的救済を捨象し、礼子をめぐる葛藤に引き込まれた男二人には、ついに結論を与えない。それは明らかに破綻を予測させる三角関係の続行であり、よりいっそう悲恋を際立たせ「悲劇」的様相をつよめることになる。この試みの延長線上に、「近代」を強く意識して「能楽」を読みかえる『近代能楽集』があらわれることになる。

『近代能楽集』の試みを終えた三島由紀夫は「季節はずれの猟人 堂本正樹氏のこと」で、能楽について「たまたま『プロゼルピーナ』は墮地獄の物語である。わが中世の能にもしばしば用ひられたこの主題、墮地獄の苦患と孤独の主題は、一面、いかに今日的であらうか！ われわれは一人のこらず、何らかの地獄に落ちてゐると云つても、過言ではないのが現代といふ時代である」と書いている。戦後は「一人のこらず、何らかの地獄に落ちてゐる」ながら「墮地獄」を救う機構のない時代とみなされている。戦争下での死に人生の清算を期待していた三島由紀夫が、生きのびてしまった戦後から眺めたときに、「生の否定」や「悲劇」を、仏教的救済へ回収しないアイロニカルな能楽を発見したのだといえる。『近代能楽集』は、謡曲に盛られた「生の否定」という主題が、近代においては仏教的救済ということが断ち切られているために、よりいっそう強調され、「生の否定」を生きるという実存的な試みは能楽の創造的破壊、もしくは破壊的創造といつてよいと論じている。

第一部 「近代における『能楽』の発見から三島由紀夫の能楽受容まで」では、『近代能楽集』を論じるための前提を確認している。

第一章 「近代における能楽表象——国民国家、大東亜、文化国家日本における『古典（カノン）』として」では、近代における「古典（カノン）」としての能楽の意義の変化を、主に各種新聞、能楽専門誌や関連書籍、公文書を通して概観している。まず明治初めまでの能楽のあり方を確認し、日清戦争前後においてみいだされる「古典」としての能楽を明らかにし、アジア・太平洋戦争のもとで「大東亜の総合芸術」となって海を越える能楽について検討している。ついで戦後すぐに「民主主義」国家日本、「文化国家」日本の「古典」という位置を確保した能楽をとらえる。前近代の遺物としての能楽を記録した正岡子規や夏目漱石らもいれば、近代にとっての異物だからこそ能楽を近代文学や演劇へと取り込んだ北村透谷や泉鏡花、郡虎彦、野上弥生子、三島由紀夫がいる。戦後は、能楽という枠を越えて演劇や文化と結びつく能楽師や狂言師の動きも盛んになり、新作能は能楽というよりむしろ、現代演劇と交わる新ジャンルになりつつある。近年、謡曲のドラマや能楽師のイメージは、時代を越えた宇宙規模のSFとしてマンガやアニメーションへも受け継がれ、現在を映し出している。国民国家日本に「古典」として発見され、三度の転換を経てなお「古典」でありつづける能楽について論じている。

第二章 「三島由紀夫の能楽受容——『言葉の優雅』から『実際の行動』まで」。三島由紀夫の能楽受容といった場合想起されるのは、一九五〇年発表の戯曲「邯鄲」に始まり、一九六二年の戯曲「源氏供養」に至るシリーズ『近代能楽集』である。だが、三島由紀夫自身が「戦時中の作品『中世』がそれであるし、戦後の『近代能楽集』や、小説『金閣寺』から、『英霊の声』にいたるまで、能楽はたえず私の文学に底流してきた」（「日本の古典と私」）というように、『近代能楽集』が、三島の能楽表象の全てではない。むしろ、「能楽はたえず私の文学に底流してきた」と言い得る稀有な三島由紀夫の能楽理解は、能をめぐる多くのエッセイや小説を通して、より明らかになる。少年三島由紀夫は中学一年生で初めて観た能の舞台から、不明瞭な発音で謡わ

れる詞章、すなわち縁語や掛詞に彩られた「言葉の優雅」を捉え、次に謡曲の美しい死者たちの「悲劇」に魅せられた。戦中の三島由紀夫による能楽の表象は、サブタイトルに謡曲の名を冠し、詞章をふんだんに引用し、能楽の持つ「悲劇の本質」（「夢野乃鹿」）をそのまま小説にしたかのような「夜の車」（のち「中世に於ける一般人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」に改題）に、もっともはっきりとあらわれている。敗戦によって、日本の古典を賛美して古典趣味を全面的に押し出す創作が不可能になったとき、三島由紀夫の能楽表象は大きな転機を迎える。戦後の異物としての能楽を再提示する試みは、死者ではなく生きて苦しみ続ける生者のドラマへと向かい、シリーズ『近代能楽集』を頂点に、「金閣寺」「美しい星」に底流し、『豊饒の海』四部作へと至る。しかし、「悲劇」「絶望」「生の否定」「墮地獄の苦患と孤独の主題」と呼ばれ、三島由紀夫が戦後を相対化するための手段であったはずの能楽は、「英霊の声」で修羅能の形式が選ばれて以降に変化し、「実際の行動に近い一回性」（『行動学入門』）として、行動の真の指針となっていくと指摘している。

第二部 「『近代能楽集』作品論」では、能楽への現在的アプローチという意味で特に際立った『近代能楽集』中の戯曲を、発表の順にたどっている。

第一章 「能楽における『生の否定』の発見——近代能楽集ノ内『邯鄲』」、第二章 「認識者と実践者との葛藤の帰趨——近代能楽集ノ内『卒塔婆小町』」、第三章 「救いなき死の受容——近代能楽集ノ内『葵上』」、第四章 「不幸と狂気の美的結晶体——近代能楽集ノ内『班女』論」、第五章 「覚醒した紅い唇の女——近代能楽集ノ内『道成寺』」、第六章 「『この世のをはりの焰』は消えず——近代能楽集ノ内『弱法師』」、第七章 「切り捨てられた供養——近代能楽集ノ内『源氏供養』」。

舞台を「近代」（戦後）にとる『近代能楽集』各曲においてすべての戯曲に共通しているのは、登場人物たちがつねに生きている時代との関係を、それぞれの視点から否定的にとらえていることである。（次郎）「（顔をそむけて）子供が生れる。こんなまつ暗な世界に。おふくろの腹の中の方がまだしも明るいのに。なんだつて好きこのんで、もっと暗いところへ出て来ようとするんだろう、馬鹿々々しい」（「邯鄲」）からはじまり、（金子）「われわれだつてこんな悪い時代に生きていて、自分をごまかすためにどれだけの苦しみを重ねているか」（「綾の鼓」）、そして、（俊徳）「この世はもう終っているんだもの」（「弱法師」）まで、近代（現代）への負の価値判断が、本来の自分を「ごまか」して生きる、または「終っている」世界に溶け込めないままに生きる悲劇をもたらしている。

こうした悲劇は、「邯鄲」の次郎の何ら期待もなく生きることや、「綾の鼓」の恋愛の不成立、「卒塔婆小町」の百年ごとに必ず繰り返される認識者と実践者の葛藤、「葵上」における葵の救いなき死、「班女」での狂女と続く常識的には実りのない共同生活、「道成寺」における赤い口紅を塗る清子の前にひろがる汚濁にみちた世間、そして「終わった」世界で奇矯な言動をとることしかできない「弱法師」の俊徳という形で全ての戯曲のクライマックスで強調される。自らが置かれた時代や場所や関係へのこうした不適応は、三島由紀夫自身が戦後を表象するときにつねに繰り返される嫌悪や、その究極的なかたちとしての「決して自殺が出来ない不死身者の不幸」（「毒薬の社会的効用について」）にも重なってゆく。

三島由紀夫は「宗教的末世思想と美の優位との並行関係」には「美と死との相関」があるといい、「この相関は謡曲において完全な一致に到達する。日本に於て美は、人間主義の復活を意味

せず、『生の否定』といふ宗教性を帯びるにいたる」（「美について」）といっている。謡曲における「生の否定」とは、彼岸での救済と対をなす此岸の否定、もしくは神仏によってのみ悲劇が打開できるという意味での、此岸の生の否定である。「近代」において「生の否定」を死後の肯定へと反転してくれる宗教性は失われ、戦後の日常にあつては死も遠い存在である。能楽を「墮地獄の物語」と呼んで、三島由紀夫が謡曲の翻案に際して、仏教的な救済としての死を切り捨てたのは当然である。こうして『近代能楽集』シリーズは、「生の否定」を生きる者たちの「悲劇」の凝縮、「決して自殺が出来ない不死身者」たちの「墮地獄」、つまりは三島由紀夫にとっての戦後という時代の表象になったのだと論じている。

第三部 「能楽との関わりで郡虎彦の戯曲と三島由紀夫の小説を読む」では、『近代能楽集』を先導したといつてよい郡虎彦の戯曲を紹介し、三島由紀夫の最初期の小説中でもとりわけ能楽との関りの深い「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」と、遺作『豊饒の海』四部作とを、能楽という視点から読み直している。

第一章 「血の粉を撒いた『珍しい夜明け』へ——郡虎彦の戯曲『清姫 若くは道成寺』と戯曲『道成寺』」。本章は、三島由紀夫とはまったく異なった手つきで能楽に対して郡虎彦の戯曲「清姫」と「道成寺」を捉え、『近代能楽集』シリーズを導くものとしての郡虎彦を考察している。郡虎彦は、初期の志賀直哉にどこか似て、後の有島武郎へも通じる白樺派の一面を担った作家だが、浪漫主義的な血塗れの想像力によって、白樺派の人道主義や反戦の思想を強力に先取りしただけでなく、一九一〇年代前後を象徴する作家のひとりでもあった。

「深いところで現実強い違和感をいだ」（本多秋五『明治文学全集 初期白樺派文学集』「解題」）き、題材の上でも国家という枠組みにおいても、「現実」を乗り越えようとし続けた郡虎彦は、内側から日本を食い破るように血みどろの物語を書いて、日本を脱出し、渡欧後も転地を繰り返しながら客死した。そんな郡虎彦に、同じくたえず「現実」からの飛翔を試みた三島由紀夫が惹かれるのは、当然だったのかもしれない、三島由紀夫は郡虎彦に「現実」からの逃避や逸脱というよりむしろ、烈しく「近代」と衝突し、その結果「古典劇」の「翻案」へと行き着いた先達を見出したのだといえる。

第二章 「言語による美的抵抗——三島由紀夫の『中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃』」。本章は能楽との関わりから、この難解な小説を読み直そうとするものである。

「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」には、一九四四年八月に発表された「夜の車」という初稿がある。「夜の車」というタイトル自体が謡曲「松風」の詞章、すなわち「みつ汐の夜の車に月を載せて」から取られており、改稿に際して削除された末尾には謡曲「松風」の詞章の引用があった。謡曲「松風」の引用から見えてくるのは、決して報われることのない同じ行為を繰り返す悲劇のドラマとしての「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」であり、それ以上につらく苦しい此岸から仏教的な救済の彼岸への跳躍を目指す能楽そのものが、死によって安らかな美を付与する殺人者自身のあり方へと継承されるということである。戦争という大量殺人の只中で、入営に脅え死に脅え、身近に迫った外部からの死を内面化しようと足掻く少年三島由紀夫の混乱した精神世界を映す小説「夜の車」とその改稿「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」は、こうして最初期における三島由紀夫の濃密な能楽表象となり得ているのだと論ずる。

第三章 「『豊饒の海』の行き着いた『美しい衰亡』——能楽表象からの読解の可能性」。『豊

饒の海』の「記憶もなければ何もない」というラストシーンは、第二巻「奔馬」で本多繁邦が能「松風」を観たときから、すでに必然であったといつてよい。謡曲「松風」の詞章を思いつつ松枝清頭を想起する本多は、すでに清頭の美の本質が「厳格な一回性」であることに気づいていたからである。青春の日に束の間あらわれてすぐに失われたからこそ、唯一無二の美しい存在として本多繁邦の心を縛った清頭は、転生者に希望を繋ぐことでは決して取り戻せない。逆に三人の転生者候補は次第に清頭の面影を破壊して、美しかった本多の中の清頭を、謡曲「羽衣」で語られる天女の死としての「美しい衰亡」へと陥らせる。なぜ本多繁邦は、何人も転生者らしき人物に出会っても満足できず、清頭探しをやめられないのか。また清頭探しの最後を締めくくる巻が、なぜ「天人五衰」と題されているのか。絶対的な悲恋の枠組みとしての謡曲「松風」と「羽衣」を介して、『豊饒の海』を読み直した論である。

3、総評

本研究の意義は、能楽と三島由紀夫との関わりを、近代における能楽受容という大きな枠組みと、その能楽の影響のもとに書かれた『近代能楽集』、および「中世に於ける一般人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」『豊饒の海』などの三島由紀夫作品の詳細な分析的読解によって、立体的に浮き上がらせたところにある。その論証はおおむね妥当であり、三島由紀夫研究史上においても一定の評価を与えうる説得力に富むものである。

第一部第一章で全体的な大きな視野から近代における能楽受容のあり方について論じ、第二章では三島由紀夫の能楽受容の具体的な様相について論じている。またそれを踏まえて、第二部では『近代能楽集』に収められた作品について個別に論を立てているが、それらのいくつかはすでに学会誌に掲載されているところから、その立論の確かさを確認することもできる。第三部第一章では三島由紀夫と同じく能楽に大きな影響を受けて劇作をおこない、また三島自身も少なからぬ影響を受けた郡虎彦を取りあげて、三島文学との関連と差異を確認している。第二章では小説「中世に於ける一般人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」を、第三章では最後の大作『豊饒の海』四部作を取りあげて、それぞれ能楽との関連という視点から論を展開、これまでの論を補強し、妥当な結論を得ている。能楽との三島文学と関連については、これまでの研究において多く論じられてきたものの、これほど網羅的に徹底して論じられるということとはなかった。その意味で、本研究は三島由紀夫研究において新たな一步を大きく前進させたといえることができる。

本研究はこうした意義を持つものではあるが、まったく難がないわけではない。それは『近代能楽集』に収録された戯曲のうちの「綾の鼓」「熊野」の二作品の論が欠落していること、近代の能楽に関する把握がやや概念的、観念的に過ぎること、三島由紀夫が『近代能楽集』に取り組んでいた時代の新劇界の動向についての調査が充分におこなわれていないこと、先行論文の扱い方において若干の問題があったこと、文章が生硬で観念語が多く用いられているところから、ときに論が表面的に流れてしまっていることなどである。しかし、これらは今後、研究を持続してゆく努力によって克服されるべきものであり、本研究自体の価値を左右するものではないとして、審査委員一同、本論文が「博士（学術）」を授与するに十分値するものであるとの結論に達した。ここに報告する次第である。